様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０３１９

研究課題名（和文）共和制コスモポリタニズムからみるアメリカ近代化の様相

研究課題名（英文）Cosmopolitanism in the Early Republic

研究代表者
若林　麻希子（WAKABAYASHI, MAKIKO）

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：５０３２３７３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円、（間接経費）　　600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では「コスモポリタニズム」をキーワードに据え、アメリカ近代化の歴史を主にエスニシティに関する意識変革の歴史として再編成することを試みた。共和制コスモポリタニズムの伝統が、WASP的人格に凌駕される過程を建国期文学の中に辿った一方で、コスモポリタニズムの伝統が、WASP化するアメリカに相対する価値観として、ニューヨークの地域性として残存する現象が確認された。その結果、WASP的価値観の是非を巡る文化的葛藤、さらには国家主義と地方主義の間の対立といった要素を、アメリカ近代化の現象として抽出することが出来た。

研究成果の概要（英文）：This study tried to observe the relationship between the cosmopolitan American character and America's development as a modern nation. Cosmopolitanism was considered to be one of the important virtues in the early Republic. As J. Hector St. John de Crevecoeur imaged the American as "a mixture of English, Scotch, Irish, French, Dutch, Germans, and Swedes," the sense of living in a multiethnic nation was alive in the American consciousness in the Revolutionary period. But the examination of various expressions of cosmopolitanism in the literature of the founding era has revealed that cosmopolitanism, on the one hand, ceased to be a characteristic mindset of the American, giving place to the emerging dominance of WASP, but, on the other, it survived as a regional character of New York. The result is a view that America's national development was bounded with ideological conflicts between cosmopolitan and WASP idealism, and also between provincialism and nationalism.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学　　英米・英語圏文学

キーワード：コスモポリタニズム　ニューヨーク　建国期アメリカ文学　歴史小説　共和主義　民主主義

１．研究開始当初の背景

（１）本研究は、第一に、アメリカ研究における共和制文化の歴史的評価の遅れについての問題を踏まえた結果としてある。アメリカ共和制文化への学問的関心はポストコロニアリズム批評の隆盛を受けて 1990 年代に一気に高まりを見せ、現在では共和制アメリカをトランスアトランティックな視点から再評価する研究が活発化している。しかし、これら既存の研究において実践されている新歴史主義的な方法は、共和制アメリカの時代的特異性を明らかにすることは出来たが、アメリカの文化的成長という、より広汎な歴史的コンテクストの中で共和制文化を評価するには限界があった。例えば共和制文化がアメリカ文化のその後の発展にどのようなかかわりを持ち得たか、といった問いかけに対して、それらの研究が答えを与えることはなく、18 世紀から 19 世紀への転換期にあたる共和主義時代は、未だアメリカ文化史の空白として取り残されている現状が存在している。本研究は、そのような空白を埋める言語として「コスモポリタニズム」を提案する試みとして、共和制文化の歴史的評価につながると考えた。

（２）本研究は、第二に、平成 20 年度から平成 22 年度にわたって基盤研究(C)の交付を受けて行っている「共和主義パラダイムで語るアメリカ近代化の歴史」（課題番号 20520215）で得られた成果を踏まえた試みであった。前回の科研費研究では、「性的差異の制度化」をキーワードにアメリカ近代化の歴史をジェンダーに関する女性の意識改革の歴史として再編成することを試みた。性差が「程度の差（“difference in degree”）」から「種類の差(“difference in kind”)」へと概念的変化を遂げる 18 世紀末のアメリカを背景に、服装倒錯や同性愛感情といった多様なジェンダー・パフォーマンスを披露する女性の系譜を主に求婚小説に辿ることによって、「共和国の母」、「真の女性らしさ」、そして「家庭の天使」といった従来の家庭性イデオロギーの枠組みに収まらない、逸脱的な女性の内面が浮き彫りになった。このことは、つまり、アメリカにおける共和主義から民主主義への移行が、従来的な理解を超えて、極めて劇的な意識改革を伴うものであったことを証言するものであった。建国期アメリカでは、自国の共和政体のあり方を説明する表現として「民主的共和国（Democratic Republics）」、「議会制民主主義（Representative Democracy)」などの言語を使用していたことが示唆するように、当時のアメリカの政治的自意識は、共和主義と民主主義の境界は極めて曖昧なものと捉える傾向があったのに対して、共和国の女性達が、家庭性イデオロギーの制約内に身を置くことによって民主主義の有意義な担い手としての自覚を研ぎ澄ます中で、結婚や家庭に馴染まない「私」に密かに封印する求婚小説特有のドラマからは、共和主義から民主主義への移行が必ずしも緩やかな連続ではなく、むしろ断絶であった可能性を示唆するばかりでなく、そのような断絶が、アイデンティティを巡る私的個人の物語にこそ刻印されていることを示してくれた。このように、前回の科研費研究を通して、アメリカにおける近代化現象の真のインパクトの実体を解明するべく、継続的に、私的個人の物語に耳を傾ける必要が生じた。

２．研究の目的

本研究は、建国期アメリカの共和制文化のパラダイムを土台にアメリカの近代化の歴史を語り直す試みである。アメリカ近代史は 19 世紀以降の民主主義発達の歴史へと単純化される傾向が強い。そこで本研究では、アメリカにおける近代化の問題を「コスモポリタニズム」をキーワードに共和制文化の流れの中で捉え直すことによって、既存の民主主義パラダイムから切り離し、主にエスニシティーに関わる意識改革の歴史としてアメリカ近代化の歴史を再編成することを具体的な目標として設定した。

３．研究の方法

コスモポリタニズムをキーワードにアメリカ近代化の歴史を再編成する作業には、多岐にわたる分野の調査が必要なため、膨大な時間と労力を要することが想定されたため、本研究では、文学的枠組みを利用することで調査の範囲を絞ることとした。建国期のアメリカでは、歴史小説、旅行記、そして風俗小説が文学を支えていた。これらのジャンル的特徴を生かして、アメリカ・コスモポリタニズムの伝統の推移を、近代化の推進力となる西漸運動、外交問題、そして産業革命を視軸に考察するカルチュラル・スタディーズの方法を、本研究では採用した

４．研究成果

（１）本研究における最も顕著な成果は、「コスモポリタニズム」という概念を、アメリカ近代化の歴史を共和制パラダイムで再編成するための新たなキーワードとして獲得したことである。このことは、しかし、当初予想された結果を実証した以上の成果を含むこととなった。以下は、その概要である。

「コスモポリタニズム」とは、共和主義的美徳のひとつとして、アメリカの国民的自意識を支える概念として機能していた。「アメリカ人は何者か？」という問いかけにいち早く応じた *Letters from an American Farmer*（1782）の作者 J. Hector St. John de Crèvecoeur が、アメリカ人を“race”と呼び、その人種的アイデンティティをイギリス人、スコットランド人、アイルランド人、フランス人、オランダ人などのヨーロッパ系移民の混成主体（“mixture”）として提示したこと

は有名だが、このような Crèvecoeur のアメリカ人観に端的な例を見出せるように、建国期のアメリカには、多民族国家を生きているという国民的な意識が顕在していた。しかし、アメリカ人であることをコスモポリタニズムの枠組みで捉えるメンタリティは、ジャクソニアン・デモクラシー以降、急速に衰弱、消滅してゆく。このことは、例えば、Ralph Waldo Emerson による「透明な眼球（“transparent eyeball”）」という「無」と「無限」の撞着を超越した自我イメージや、Walt Whitman による“Song of Myself”(1855) において、「私（“myself)」が媒体となって立ち現れるアメリカ人像、それは、すなわち、Nancy Ruttenburg が極めて的確に「民主主義的人格（“Democratic Personality”）」と呼ぶ、多声性に特徴をもつ主体イメージのなかに、Crèvecoeur のアメリカ人を特徴付けていたコスモポリタニズムのヴィジョンの再現を見出すことが出来ない、という事実に端的に現れている。

このような Crèvecoeur から、Emerson を経て、Whitman に至るアメリカ人観の変貌は、従来、ナショナリズムの勃興に伴うものとして説明されてきた。しかし、本研究では、Joyce D. Goodfriend による植民地時代の民族同化論 *Before the Melting Pot* (1992) などの先行研究を踏まえることによって、例えば、Washington Irving による *The Sketch-Book* (1819-20)、特に“Rip Van Winkle”といった作品の中に、オランダ系移民の子孫が、むしろ、自らの民族的起源への執着を捨て、英国臣民としての自意識、更には、アメリカ合衆国市民としての自意識を発達させること、および、Catharine Maria Sedgwick による *The Linwoods* (1835) において、自由というアメリカの理想の下、異種混交の世界観が統一される瞬間を見出すことが出来ることの中にイギリス化（“Anglicization”）の表現を見出すことができた。Crèvecoeur から Whitman に至るアメリカ人観の変貌とは、必ずしも、ナショナリズムの勃興のみに原因を求められるものではなく、コスモポリタニズムに象徴される多民族意識が WASP 的人格へと同化、吸収される現象として捉え直す余地のあることが、本研究によって示されたのである。

しかし、このことは、「コスモポリタニズム」という理念が、近代化という共和主義から民主主義へのパラダイムシフトをアメリカが経験するなかで、完全に無効化されてしまうことを意味するものではない。本研究では、当初、全く予想しなかったことだが、「コスモポリタニズム」は、アメリカン・アイデンティティの根幹として国民的意義を喪失するものの、ニューヨークの地域性として、建国期アメリカ文学に特徴的に立ち現われることが判明したのだ。

そこで、ニューヨークの地域性という問題を掘り下げて調査したところ、ニューヨークがオランダ植民地ニューネザーランド（New Netherland）を起源にもつ地域であることを踏まえ、そのような出自が広くアメリカ合衆国の興りにどのような影響を与えたかを検証しようとする試みが、主に歴史学の分野で進められていることが分かった。オランダによる北米大陸入植に関する資料の収集および翻訳を 1974 年以来継続してきた New Netherland Project の成果が入手可能になり、Russell Shorto による *The Island at the Center of the World* (2005) や Jaap Jacobs, *The Colony of New Netherland* (2009) などの研究書が出版されるまでに至っている。これら最初期のニューネザーランド研究は、Edwin G. Burrows と Mike Wallace による *Gotham: A History of New York City to 1898* (2000) などの既存のニューヨーク研究を進化させたばかりでなく、“Dutch New York”と呼ばれる新たなトポスへの扉を開くことに成功し、ニューヨークが、北米オランダ植民地ニューネザーランドに由来する寛容主義精神を伝統的に継承する地域であることを示してくれた。

共和制コスモポリタニズムの伝統の推移を考察するため、本研究では、建国期文学、具体的には、James Fenimore Cooper による歴史小説、Washington Irving による旅行記、Catharine Maria Sedgwick による風俗小説を分析対象に採用したが、これら作家たちは共通して Philip Gould が「コスモポリタン国家（“Cosmopolitan Nation”）と呼ぶ、「アメリカ人」の意識がいまだ不鮮明で未分化である異種族混交のトポスを作品に取り入れる際、確かに、ニューヨークを舞台に据えている。独立革命後、WASP 優位のナショナリズムが高揚する中、アメリカ人作家が、ニューヨークを舞台にコスモポリタニズムの世界観を演出するのは何故か。その問いかけに対する可能な回答を見出すため、個別作家が、コスモポリタニズムの理念をニューヨークと連想することにどのような意味を見出すことが出来るのか、更に調査、研究を行った。その結果の概要は次の通りである。

James Fenimore Cooper は、「革脚絆物語（The Leather-Stocking Tales)」の中で、主人公 Natty Bumppo の 60 年間にわたる生涯を描く五部作のうち、実に四作品の舞台をニューヨークに設定している。Natty Bumppo といえば、Leslie Fiedler が「人種的純血性の熱狂的支持者（“a fanatical exponent of racial purity”）」と呼ぶ、純血白人意識に囚われながらも、モヒカン族インディアンとの深い友情に身を捧げる辺境人であることから、その混成主体としての文化的意義が問題視されてきたアメリカン・ヒーローである。しかし、オランダ植民地の寛容主義の伝統を受け継ぐニューヨークの地域性に着目することによって、Natty Bumppo の主体的混成性が、必ずしも、白人とネイティブ・アメリカンの二元性に依拠する性質のものではなく、

むしろ、多民族多文化主義を許容する心性の表現として再評価できることが明らかになった。*The Pioneers*（1823）において Natty Bumppo は、西漸運動を主導する開拓者の先頭に立つ者と設定され、批評的にも先住民排除を含む西漸運動の暴力性を隠ぺいし、領土拡張を正当化する文化的役割を担うヒーローとする見方が定立しつつある。しかし、そのニューヨーク土着というステイタスは、Natty Bumppo が、西漸運動の排他性に対して、寛容主義、多民族多文化主義を突きつけながら、同時代ナショナリズムのあり方を批判的に問題化する役割を担っていることを鮮明にしてくれた。このように「革脚絆物語」の調査、研究から、ニューヨークの地域性として残存するコスモポリタニズムが、WASP 化するアメリカに批判的に相対する価値観として機能していることの例を獲得することができた。

また、Washington Irving については、主に旅行記を中心に調査、研究を行ったが、WASP 化の傾向を強めるアメリカ・ナショナリズムに対する対抗文化としてコスモポリタニズムを援用する同様の方法論を見出すことができた。例えば、Irving の *The Sketch-Book* は、従来、独立革命後のアメリカにおけるイギリスへの憧憬に表現を与えた作品だとする捉え方が主流であった。しかし、本作品は、同時に、語り手ペルソナ Geoffrey Crayon が、イギリスを「祖国」と認識することが出来なかった悲哀を語りの起源とする、いわば、祖国喪失の物語という側面をもっている。そこで、本研究では、後者の前提に立ち、*The Sketch-Book* をアメリカの過去を問い直す国家言説として読み直すアプローチを試みたところ、Irving のアメリカには、アングロ・アメリカ成立以前、ヨーロッパ各国の勢力争いの場として存在していた新大陸アメリカの多民族多文化主義的様相の反映を見出すことができた。Irving もまた、WASP 化するアメリカの動向に対して批判的な眼差しを向けながら、アメリカの起源性を、アングロ・アメリカから切り離し、コスモポリタニズムに求めたのである。

Catharine Maria Sedgwick については、風俗小説の枠組みで調査、研究を行ったが、コスモポリタニズムの伝統について多くの知見を獲得することが出来たのは、やはり、*A New-England Tale*（1822）、*Hope Leslie*（1827）、更には *The Linwoods*（1835）などの歴史小説においてであった。これら作品は、民主主義国家としてアメリカを定義化しようとする意図において共通点を見出すことが出来る。しかし、*A New-England Tale* および *Hope Leslie* では、民主主義国家としてのアメリカの起源をクエイカ一教の理念に求める一方で、*The Linwoods* においては、ニューヨークの多民族多文化主義的空間が、建国神話の根底に据えられるという仕組みが採用されている。

共和制コスモポリタニズムをキーワードに据え、アメリカ近代化の様相を考察することは、共和主義から民主主義へのパラダイムシフトが決して緩やかな連続ではなく、むしろ、断絶と対立を内包するものであったことを伝えている。奴隷制を巡る南北対立の危機以前に、アメリカは、WASP 主導のナショナリズムと共和主義的コスモポリタニズムの間の葛藤に満ちた選択を強いられていた現状を浮き彫りすることによって、本研究では、アメリカにおけるナショナリズムの複雑な内面に迫ることが出来た。

（２）今後の展望

本申請の研究は、上記（１）に詳細を示したように、コスモポリタニズムという 18 世紀共和制文化のパラダイムを利用して、アメリカ近代化の歴史観を流動化する視座を構築する試みとしては一定の成果を挙げたと自己評価している。しかし、学会発表や論文を通して成果を発信する、という当初計画の実行については反省すべきところが多く残ってしまった。特に、本研究を遂行する上で極めて意義深い発見となったのが、コスモポリタニズムとニューヨークの関係性である。本研究では、コスモポリタニズムが、歴史的概念であることを前提としていたが、それが、実は、地域性とより根本的なところで関わっている可能性が濃厚になった以上、ニューヨークの地域性としてのコスモポリタニズムの歴史的、文化的意義の調査、研究を是非とも行いたいと考えている。そうすることによって、前述した“Dutch New York”が、広くアメリカの興りにいかなる影響を及ぼしていたかに関する歴史学的の問題に、文学研究の立場から貢献することができるのではないかと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①若林麻希子、スザナ・ローソン『テンプル』二部作における女性領域――新たなる女性経験の地平をめざして、『関東英文学研究』支部統合号，査読有、第５号，２０１３年、91-98

〔学会発表〕（計２件）

①若林麻希子、歴史小説とニューヨーク――アメリカン・アイデンティティをめぐるイマジネーション、日本アメリカ文学会第 52 回全国大会シンポジア Ⅰ「初期アメリカ文学とニューヨーク」、2013 年 10 月 13 日、明治学院大学白金キャンパス、

②若林麻希子、Kate Chopin の“Lilacs”を読む、日本英文学会第８３回全国大会シンポジア「精読の射程―アメリカ文学名作短編再発見」、２０１１年５月２２日、北九州市立

大学、

〔図書〕（計１件）
①若林麻希子、三修社、『アメリカ文学入門』、２０１３年、34-35、38-39、42-43、48-49、66-67、76-77、310-313、

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
若林麻希子（WAKABAYASHI MAKIKO）
青山学院大学・文学部・教授
　研究者番号：50323738

(2)研究分担者
（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

　研究者番号：